

# 無言館における鑑賞を通じた実践教育

渡辺 一洋・坂西 さと美

## Practical Education Through Students' Observation of MUGONKAN

Kazuhiro Watanabe, Satomi Sakanishi

### Abstract

Countless serious problems such as homicide, suicide, and child abuse have kept occurring recently in Japan. Although Japan has become wealthy through a rapid economic growth after the World War II, the number of people who have mental problems has exponentially increased. In 2002 the author conducted fieldwork at a municipal museum named MUGONKAN in Gunma that contained a number of art pieces whose authors had died in the war. Although there is no course of fieldwork open at Ikuei College, many other colleges hold fieldwork-related courses and report that fieldwork consequently enables students' academic skills.

Taking what is mentioned above into consideration, I established an opportunity for the members of the Ikuei College Photo Club to observe and study the museum. Although one-time visit on the museum isn't enough for fieldwork, the members studied through the observation of the pieces the following aspects; time, expressions, views on life, and understanding of war and mental growth. In this paper, I presented and discussed the process of this introductory fieldwork and the outcomes of students' questionnaires and the fieldwork on the whole.

Keywords: time, expressions, views on life, and understanding of war and mental growth

キーワード: 「時間」「表現」「生命観」「戦争理解と心の豊かさ」

### 1. はじめに

現在、日本において「生命」をめぐる様々な問題が起きている。このことに関しては、コミュニティーの中心である家族の形態や地域社会の変化が影響を及ぼしていると考えられる。また、戦後50数年を経て、戦争の実態についての認識は風化しつつある。

このような時代の流れの中から、筆者らは日中

戦争、太平洋戦争の時代で制作された戦没画学生の絵画表現に着目し、戦没画学生の絵を展示している戦没画学生慰霊美術館「無言館」に注目した。さらに無言館を通じた鑑賞教育から「生命観」を学生に伝えることについても可能性があると考えた。

その理由としては、戦地に出征するまでの限られた時間の中で絵を描き、画家を志しながらも戦死した戦没画学生の遺作が展示されているか

らである。このことが、今の学生にとって失われつつある生命と時間の認識や戦争理解、芸術表現の根源を知るにも素晴らしい施設であると考えられたからである。そこで、筆者らの勤務する短大において、表現活動を目的としている育英短期大学フォト（写真）部の学生5名を対象とした「無言館における鑑賞を通じた実践教育」を行い、実践前と実践後の学生の変化、無言館の鑑賞教育の可能性について、鑑賞教育の現状も踏まえながら研究することとした。

## 2. 研究の方法

### (1) 無言館の概要

まず、無言館の概要を説明する。無言館は、長野県上田市にある美術館である。言葉の無い館と書くこの美術館には、日中戦争、太平洋戦争の時代の中で「将来は絵描きになりたい」という志を持ちながら戦場から帰ってこれなかった画学生達の遺作を中心に、遺品も展示されている。そこには油絵の他、彼らが戦地から親兄弟に宛てた手紙、戦場で肌身離さずたずさえていたスケッチブック、あるいは絵の具箱等が並べられている。

昨今は美術館不況とも呼ばれ、公・私立を問わず、各美術館が来館者減少で頭を悩ませているこの時期に、平成9年5月に開館した無言館には年間10万人近い来館者が訪れる。それは無言館が他の美術館にはない特徴をもっているからだと思われる。来館者の大半は絵画を鑑賞する。しかし、その鑑賞するという以外にも、戦争によって多くの若者達の命と未知なる才能が奪われたことを確認するために訪れるのではないかと考えられる。

戦没した画学生の絵は、反戦、平和のためだけに描かれたわけではなく、彼らは限られた青春の時間の中で、大好きだった絵をとことん描き続け、故郷から後ろ髪を引かれるように、戦地に赴いた。彼らは出征すれば、生きて帰って来れないことを漠然と感じながら、出征までの限られた時間を大

好きな絵に打ち込んだものと考えられる。そこに描かれているのは、ある者にとっては恋人であり、妻であり、妹であり、姉であり、そして、父や母であり、幼い頃遊んだ故郷の山河の風景である。それらを描いて、若者達は戦地に散っていったのである。そこに描かれた作品の一つ一つには、自らの命を尊び、そして、尊い自らの命を育ててくれた親族への感謝、自分の周辺を取り囲んでいる多くの友達、そして、その青春の中で精一杯生きた尊い時間が刻まれている。

戦死した画学生の絵は、現在の私達が失いかけている日本人としての懐かしい風景、濃密な家族関係、親や親族に対する思い、敬いの心、そして、自らの命への尊厳を語り継いでいる。

### (2) 無言館設立の経緯と現在の取り組み

無言館は、窪島誠一郎<sup>(1)</sup>と野見山暁治<sup>(2)</sup>により、国の支援を受けずに、戦没画学生の遺族宅を訪問しながら遺作収集をし、その遺作や遺品を展示した個人による手づくりの美術館である。

遺族宅を訪問している途中段階では実体としての無言館は建設されていないため、窪島も野見山も共に想像の中で無言館をイメージして遺作収集を行っていたことが推測される。

無言館が完成するまでは、戦争体験をテーマにした著名作家の作品や東京国立近代美術館で戦争画が公開されることはあっても、一般の画学生である戦没画学生の絵に話題がいくことはなかった。筆者らの取材の中で、野見山は無言館について「戦争によって若者達が死なざるをえなかった時代があった過去を忘れてほしくないです。人間がある程度、死を予感した時にどういう絵を描くのかを見てもらいたい」<sup>(3)</sup>と述べ、戦没画学生の絵について「あの時代に反対されながら、どうしても絵が描きたいと一途に描いた絵の中にはそういった納得させる絵がありますよ。それは一途さが底光りしている。僕は見ている時は下手くそだと思っていたけど、半年ずっと見ている間に妙に内からく

すぐるような情熱を感じてきたんです。それを集めて並べたら本当の美術館だという思いがしてきたんです」<sup>(4)</sup>と述べている。また、窪島は無言館について「私は彼らの絵が無言なのではなく、彼らの絵と向かい合った我々が無言でしか、言葉でしか、彼らの絵と向かい合えないのだと思いました。つまり、絵のこちら側に立っている自分達が無言でしかない」<sup>(5)</sup>と述べ、戦没画学生の絵について「私はどんどん造れという時代を生きてきました。造ることを良しとする時代です。しかし、豊かになった現代に目を向けて見ますと、一番大切なことを失ってしまったことを感じています。戦没画学生の絵を見ていると、今更ながら当時の彼らを取り囲んでいた人間関係の濃密さに打たれます。濃密な家族の絆、濃密な兄弟姉妹の絆、濃密な友との絆、そこには何十年か前までは、私達の周りに存在していた懐かしい日本人の原型の姿があるような気がします。一人の人間の生命を優しく包み込んでいたごく平凡な、ごく当たり前の日常風景があるような気がする。もはや、今を生きる私達が背伸びしても取り戻すことのできない、遠い、遠い、あまりにも遠い場所に置き去りにしてきてしまった美しい日本人の原風景なのだと思います。その失われた風景の前に立つ若者の後ろ姿に無言館がこれから果たさねばならぬもう一つの役目が見えたと見えたといったら、わかってもらえるでしょうか」<sup>(6)</sup>と述べている。

このように窪島、野見山が個人的な遺作収集によって設立した無言館は前述した言葉からもわかるように、それぞれの実体験を振り返りながらも、現在の存在意義を主に若者達に向けて発信している。事実、近年、無言館では成人式が企画され、全国から成人する若者達が無言館に集い、若くして戦死した戦没画学生の絵を通して、自分や他者の生命を考える機会を設けている。

このことから、芸術表現の根源と戦争理解、人間関係、心の問題といった現代社会の課題を含み、鑑賞教育の中にも様々な教育方法としての可能性

があると考えられる。

### (3) 実践の流れと目的

今回の育英短期大学フォト部における実践教育は、①事前学習と学生へのアンケート、1回目の作品提出（写真5枚、詩や言葉を別紙にて提出を求めた）⇒②無言館での鑑賞、無言館周辺の写真撮影⇒③事後学習、ディスカッション⇒④事後の学生へのアンケート、2回目の作品提出（写真5枚、詩や言葉を別紙にて提出を求めた）という順に進めた。提出作品については、学内外の写真展や卒業時に作成するオリジナル写真集の作成に使用することとした。（表1）は①事前学習の中で行った学生へのアンケート結果である。事前学習では無言館の詳細についての説明はせず、アンケートを行った。

戦没画学生の作品は写真ではなく、絵画であるが、芸術表現という大きなフィールドにおいての根源は共通し、写真の表現は、画家を志しているわけではない絵の苦手意識のある学生であっても比較的、構図の中に自分の情感を具体的に表現しやすい表現方法である。また、1日間の鑑賞教育の実践であっても絵画表現と同様に決められた時間の中で作品を制作することとともに、参加学生全員が芸術表現として形にできる可能性が高いと考えた。

美術における鑑賞教育の現状としては、表現と鑑賞の2領域へと再編された昭和52（1977）年の学習指導要領の改訂から今日まで変わっていない鑑賞教育の現在の動向について、造形的な創造活動のひとつとされていた鑑賞学習は、今日ではそれ自体が意味を持つ自立した行為であり、表現のための補足的な働きをするものではないと認識されるようになってきている。そこには、作品制作（表現）を重視してきたそれまでの美術科教育に対する反省と同時に、学校教育を生涯学習という視点から捉えようとする時代背景<sup>(7)</sup>もある。そのため、この現状を踏まえた実践としても進めていくことと

した。

その一方で、鑑賞教育に関する多くの実践報告で、作品は指導者あるいは権威による唯一の解釈で扱われるか、児童生徒による思いつきレベルの自由な解釈に任せられている。前者の場合、目指すものが一点に絞られているので明瞭な意識に基づいた指導が可能であろう。しかし、指導者あるいは権威による唯一の解釈に児童生徒を押し込むという危険を孕む。後者の場合、児童生徒は活動を楽しむことはできるかもしれない。しかし、何かを理解もしくは獲得することはない。すなわち鑑賞の力は養成されない<sup>(6)</sup>という問題点も同時に検討した。

#### (4) 無言館を通じた鑑賞の実践内容

日 時：2006年8月23日(水) 10時～17時

参加者：育英短期大学フォト部部員（女子）

2年生3名<保育学科1名、現代コミュニケーション学科2名>、1年生2名<現代コミュニケーション学科2名>

実践場所：無言館（長野県上田市）

実践内容：無言館に展示してある戦没画学生の絵の鑑賞、無言館周辺の自然環境の中で写真撮影及び取材による人間と表現をテーマとした実技と学習

- ①無言館に到着後、無言館の建物の前に立ち、無言館の概要について説明した。その後、無言館館内に入り、戦没画学生の絵や遺品を鑑賞しながら、各画学生の作品に込められた思いやその時代背景について解説を行った
- ②鑑賞終了後、無言館周辺の丘を歩いた。広大な自然の中で、写真の構図や技法を確認し、その自然をテーマとして撮影の時間を持った。なお、研修に参加した学生達はこれまでも各自の問題意識に沿ったテーマについての写真撮影をする活動を行ってきている。

### 3. 考 察

#### (1) 学生教育に関する視点からの考察

無言館の研修終了後に学生からレポートの記載を求めた。資料の(表3)は、その結果である。

学生の感想を見てみると、無言館の戦没画学生の絵と直に対面したことによる率直な印象が伝わってくる。また、学生は戦争の事実を改めて受け止めてもいる。学生Aは事前のアンケートでは「死、人間の醜さ」(表1)という漠然とした印象を持っているが、実践後には「戦争があったことが現実的に受け止められた」(表3)と具体的な事実として認識することができている。同様に学生Cは事前の「恐ろしく残酷で悲しいもの」(表1)という印象から「改めて戦争の悲惨さ、残酷さがわかりました」(表3)と変化し、学生D、学生Eも共通の実践前と実践後のアンケートに変化が見られた。特に学生Eは「絵や遺品(日記とか)を見ていて、自然に涙が出ました」(表3)という感想を述べている。このことから学生Eは、遺品から伝わる時間の経過と戦争の事実を認識するとともに、戦没画学生の絵画表現が直接的に自分の感性へと伝達されたと考えられる。

以上述べたように、事前に無言館の詳細を説明せずに行ったアンケート(表1)と無言館の実践終了後のアンケート(表3)を比較してみると明らかに学生の意識が変化していることが見出された。また、このことから鑑賞力の向上も確認できた。したがって、美術の鑑賞教育だけでなく、現在の教育全般においても有効性があるのではないかと考えられた。

#### (2) 戦没画学生の絵と生命の尊さという視点での考察

次に戦没画学生の絵について考察することとする。学生Bは戦没画学生の絵を鑑賞して、「その人の様々な思いが込められていて、その思いが伝わってくるようでした」(表3)と述べ、学生Cは「彼

らの作品には彼らが見た事実ではなく、願いというか希望が描かれているように思いました。故郷の風景画を描いた作品は、まるで、その景色を決して忘れることのないように一筆一筆描いている感じさえしました」(表3)と述べている。学生Cの感想からもわかるように、戦没画学生の絵は戦死を漠然と予感していたにもかかわらず、決して悲観的な絵画表現が多いわけではない。むしろ、学生Cが感じているように戦没画学生の絵の多くは、願いや希望、故郷への慈しみが表現の中に込められ、当時の彼らを取り囲んでいた濃密な家族の絆、濃密な兄弟姉妹の絆、濃密な友との絆が表現されている。そこには、何十年前か前までは存在していた一人の人間の生命を包み込んでいた平凡で当たり前の日常風景、美しい日本人の原風景がある<sup>(6)</sup>と考えられる。

また、人間がある程度、死を予感した時にどういふ絵を描くのか、あの時代に反対されながら、どうしても絵が描きたいと一途に描いた絵の中にはそういった納得させる絵がある<sup>(3)</sup>という視点においても鑑賞者側に戦没画学生の絵に強く込められた思いが伝達される力があると考えられる。

戦没画学生の絵は、限られた時間の中で自らの命を育ててくれた家族や故郷などが題材として描かれ、その作品は当時、存在していたあらゆる命への慈しみが込められている。さらに「後1分この絵を描かせて欲しい」という情熱をもって制作された作品である。

戦没画学生の作品は、当時の従軍画家や職業画家に比べ、表現技法も絵画空間の構成も発展途上なものが多い。しかし、学生Cの感想にもあるように「まるで、その景色を決して忘れることのないように一筆一筆描いている感じさえしました」(表3)という感想からも生命の尊さを伝える芸術表現の根源があると筆者らは推測する。そのため、鑑賞教育から生命の尊さを学生に実感させる教材としても有効であると考えられる。

関連して、学生Aは「戦没画学生は大学を卒業

して何年もしないうちに亡くなってしまったり、今では考えられないことだと思いました。また、卒業も出来ていないうちに亡くなっている画学生もいました」(表3)という感想から、戦死した生命についての実感を持つとともに時間的な認識もできている。また、他の学生の感想からも生命と時間についての考えが深まっていることがわかる。

以上述べてきたような戦没画学生の作品解釈については、鑑賞者のある程度の絵画の鑑賞力と感性、時代背景に対する基礎知識が必要とされ、おおよその鑑賞者の各発達段階から判断した鑑賞教育の方法が必要になると考える。また、芸術の表現活動を普段行っていない学生や美術館あるいは美術そのものに興味を示していない学生に対しての鑑賞教育の方法についても、今後の課題として検証していく必要があるだろう。

## 7. おわりに

本研究は、日本において現在発生している「生命」をめぐる様々な問題から、筆者らが今回注目した無言館と戦没画学生の絵を通した鑑賞教育を育英短期大学フォト部を対象として、実践教育を行った。そして、鑑賞の実践前と実践後の学生の変化について、学生の感想から検討した結果、戦争に対する事実を実践前と比較して、実践後に具体的な認識として理解されたことが確認できた。

学生教育の考察では美術の鑑賞教育だけでなく、現在の教育全般においても有効な教材となるのではないかと検証した。戦没画学生の絵と生命の尊さという視点での考察においては、戦没画学生の表現の中に込められた内容を検証し、有効性を見出すとともに、鑑賞者の鑑賞力と感性、時代背景に対する知識と発達段階からの判断の必要性を述べた。

また、関連して筆者の1人である坂西は、さらに実践研修後、学生に対して生命の尊さについて示唆し(表4)、今回の取り組みの締めくくりとした。

今後の課題としては、さらに学校教育を生涯学習という視点から捉えようとする時代背景<sup>(7)</sup>を踏まえた実践の継続と指導者あるいは権威による唯一の解釈で扱われるか、児童生徒による思いつきレベルの自由な解釈に任せられている<sup>(8)</sup>という鑑賞教育の問題点も踏まえながら、無言館を通した鑑賞教育のみならず、様々な題材について検討していきたい。そして、芸術表現の活動を普段から行っている学生だけでなく、他の分野に興味を示す学生に対しても、生命観を捉え直すことのできる美術作品の鑑賞教育の実践に取り組んでいきたいと考えている。

## 註

- (1) 1941年～、東京生まれ。信濃デッサン館、無言館館主、作家。印刷工、店員、酒場経営などを経て、1964年、東京都世田谷区に小劇場「キッド・アイラック・アート・ホール」を設立。1979年に長野県上田市に夭折画家のデッサンを展示する「信濃デッサン館」を、1997年に戦没画学生慰霊美術館「無言館」を、2005年に京都市の立命館大学国際平和ミュージアム内に「無言館京都別館・いのちの画室」を開設。
- (2) 1920年～、福岡生まれ。南薫造に学び。春陽会初入選。45年今西中通と出会いフォービズムからキュビズムに傾倒。48年上京、自由美術会展で協会賞、同会員にもなる。52年渡仏、田淵安一、金山康喜らと交友。54-60年サロン・ドートンヌに出品、56年会員になる。58年安井賞。72-81年東京芸術大学教授を務める。83年北九州市立美術館で回顧展。画業の他に78年『四百字のデッサン』で日本エッ

セイスト・クラブ賞を受賞

- (3)～(4) 2003年9月、東京国立近代美術館における単独インタビューから
- (5)～(6) 2002年8月、無言館における単独インタビューから
- (7) 木下悌二「創造の原理に基づく美術教育の実践とその考察IV—「比較」という方法による鑑賞教育の展開—」、『美術教育学』第26号、2005年、p.179-180
- (8) 有田洋子「美術作品の解釈を検討させる鑑賞教育」、『美術教育学』第26号、2005年、pp.15

## 引用・参考文献

- ・「無言館への旅」 窪島誠一郎/著 白水社 1997
- ・「無言館ものがたり」 窪島誠一郎/著 講談社 1998
- ・「無言館の坂道」 窪島誠一郎/著 平凡社 2003
- ・「祈りの画集」 野見山暁治・宋左近・安田武/著 日本放送出版協会編集 1977
- ・「無言館を訪ねて」 窪島誠一郎/著 講談社 1999
- ・「無言館」 窪島誠一郎/著 講談社 1997
- ・「うつくしむくらし」 窪島誠一郎/著 bunya 2006
- ・「フィールドワークの方法」 杉本尚次/著 講談社現代新書 1983
- ・「フィールドワークの新技法」 中村尚司・広岡博之/著 日本評論社 2000
- ・「実践フィールドワーク入門」 佐藤郁哉/著 有斐閣 2002
- ・「人生の目的」 五木寛之/著 幻冬舎 1999
- ・「不安の力」 五木寛之/著 集英社 2003
- ・「大河の一滴」 五木寛之/著 幻冬舎 1999

## 資料

(表1)

### ～自由記述～

(※このアンケートは無言館の詳細を説明しない状態で、事前に参加学生5名に記載させたアンケートである。学生A,Cは育英短期大学現代コミュニケーション学科2年生、学生Bは育英短期大学保育学科2年生、学生D,Eは育英短期大学現代コミュニケーション学科1年生である)

1. あなたは戦争をどのように考えていますか。

(学生A) 2度と繰り返してはいけない事、死、人間の醜さ。

(学生B) 戦争をする前にもっと話し合いで解決することはできなかったのかなと思います。国は違っても見た目や言葉は違っても同じ人間に生まれて家族や大切な人がいるということは皆持っていることだし、もっともっと分かり合って誰も悲しむことのないようにして欲しかったです。この先もう2度と起きてほしくないことだと思う。

(学生C) とても恐ろしく残酷で悲しいもの。

(学生D) 罪もない人の命が奪われ、子ども達の夢や希望までも奪われた大人の行動。

(学生E) やっぱり、やってはいけないこと。でも、その時代の風潮だったから止められなかったのかもしれない。

2. あなたがこれまで聞いたことや見たことのある戦争に関する講演や本、映像あるいは訪ねた資料館などがありましたら書いてください。

(学生A～Eの記載をすべてまとめた)

(映画)「ひめゆりの塔」、「さとうきび畑」、「男たちのYAMATO」、「黒い雨」、「ほたるの墓」

(著書)「ハダシのゲン」、「あした天気になあれ」、「うしろの正面だあれ」、「アンネ・フランク」

(施設など) 沖縄の美術館に行った。広島平和記念資料館に行った。小学校や高校の授業で調べた。

3. あなたは時間についてどのような意識を持っていますか。

(学生A) 楽しい時は短く、嫌な時はやけに遅い。

(学生B) 同じ時間は無いから1つ1つを大切にしていかなければならない。

(学生C) 時間は何よりも1番大切なもので戻すということは絶対にできないので「今」を後悔しないように過ごしたい。

(学生D) 生きている間は決して止まることのないもの。

(学生E) 一瞬一瞬が大切なもの。もう戻らないから。

4. あなたにとって写真を撮ることとはどのような意味があるのでしょうか。

(学生A) 自分が見たという証拠。それを誰かに見せて共感してくれたらいい。

(学生B) 自分が感じた感動を自分の物だけにするのではなく、他の人とわかちあえる。

(学生C) 記録、気持ち、思い出など色々な想いが込められているもので、つまりは記憶そのものであると思う。

(学生D) 自分の記念や思いの一瞬一瞬を残したいという思いが写真につながっていると思います。

(学生E) 思い出を残す。心を表す。

5. あなたは人間が表現することとはどのようなことだと考えますか。

(学生A) 自分(人間)の内面を他人に見せること。

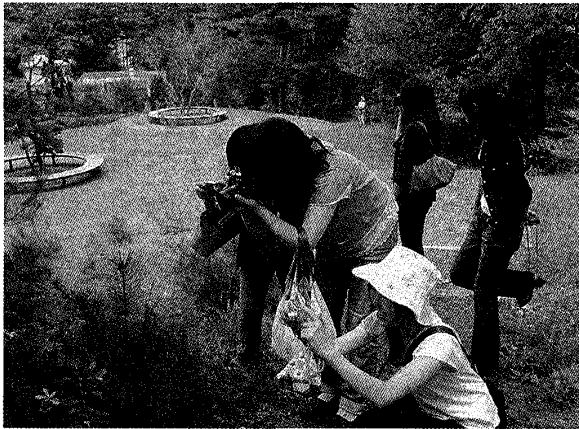
(学生B) 素敵なこと。(その表現を見たり、感じたりできることも含めて)

(学生C) 毎日生活する中でとても大事なこと。

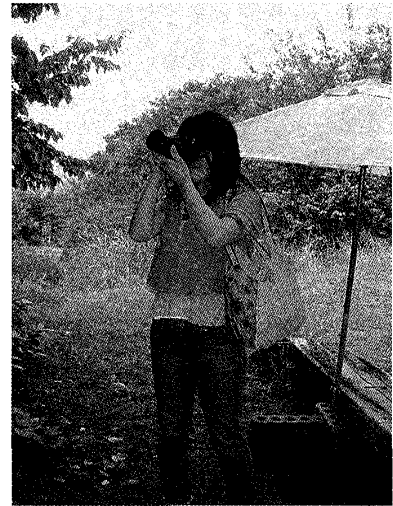
(学生D) 自分の気持ちの表れ。

(学生E) 感情がある。

(表2)



(写真1)



(写真2)

※無言館周辺での写真撮影の技術、構図、取材方法などの実地研修の様子。それぞれのテーマに沿って撮影を行った(写真1、2)

(表3)

～自由記述(研修全体を通しての感想)～

(※このアンケートは無言館の鑑賞教育実践後に参加学生5名に記載させたアンケートである。学生A、Cは育英短期大学現代コミュニケーション学科2年生、学生Bは育英短期大学保育学科2年生、学生D、Eは育英短期大学現代コミュニケーション学科1年生である)

(学生A・育英短期大学現代コミュニケーション学科2年)

無言館に行った時、平日にも関わらず、いろいろな県から来ている人達がいって驚きました。親子連れや若い人、お年よりまで様々な年代の人がいました。それだけ戦争を意識している人がいるのだなと思いました。戦没画学生は大学を卒業して何年もしないうちに亡くなってしまったり、今では考えられないことだと思いました。また、卒業も出来ていないうちに亡くなっている画学生もいました。亡くなってしまった時に持っていた遺品とか、死亡書を受け取った家族の気持ちとか、いろいろなことを考えていました。もっともっと戦争があったことが現実的に受け止められた気がしました。……写真がすごく撮りやすかったです。友達の撮っている姿を見るのも良い勉強になったと思います。



(学生B・育英短期大学保育学科2年)

夏休みに長野県の無言館に行って、日本を出たまま帰ってこれずに亡くなってしまった人達の絵を見ました。その絵にはその人の様々な思いが込められていて、その思いが伝わってくるようでした。この機会に無言館というものを他の人にも知ってもらいたいと思いました。

(学生C・育英短期大学現代コミュニケーション学科2年)

無言館へ行って、実際に学生達の遺作や遺品を見て、改めて戦争の悲惨さ、残酷さがわかりました。大人は子ども達の夢や希望を奪い、命までも奪いました。「戦争」という二文字では片付けることのできない事実です。彼らの作品には彼らが見た事実ではなく、願いというか希望が描かれているように思いました。故郷の風景画を描いた作品は、まるで、その景色を決して忘れることのないように一筆一筆描いている感じさえしました。その後、お寺や神社、別所温泉に行ったりして撮影会を行いました。私は写真を撮るとき、見たままのものを手を加えたりしないで自然に表現するのが好きです。わざときれいに見えるように、花の向きを変えたり、葉を直したりすることはしないで、自分が撮りたいと思ったものや自分が感じた感動をそのまま表現できるように撮っています。この研修では一日にも関わらず、色々な場所に足を運び、撮影することができて良かったです。その中で戦争の悲惨さを再度認識することもできたので、内容の濃い研修だったと思います。

(学生D・育英短期大学現代コミュニケーション学科1年)

今回、無言館の研修に行くことができてよかったと思います。長野県上田市には行ったことがありませんでした。写真を撮るにはふさわしい良いところでした。無言館では戦争があったことに悲しみを改めて実感しました。実際に亡くなった人の大切な気持ちを考えさせられました。残って行く者は絵だけではなく、写真も残っていきます。表現の仕方によって、その人の気持ちが表れるものなので、私はもっと多くのものを撮り、表現していきたいと思います。

(学生E・育英短期大学現代コミュニケーション学科1年)

無言館、初めて行きました。絵や遺品(日記とか)を見ていて、自然に涙が出ました。ホロッと。何も感じずに、ただ、ぽかーんと生きてる私。いつ死ぬかもわからないけど、好きな絵を描いていた彼ら。自分は色々は無駄にしているように感じました。自分の気持ちを何かで表現しようとしているのは共通点を感じました。私は写真を撮っていく上での大きなテーマがあります。それは「あなたに見せたい景色」です。自分がいいなと思う瞬間も撮りますが、この景色、見せてみたいなって、そういう風に思う瞬間を私は大切にしています。そして、写真にしています。長野へ行ったことで、自分が変わったと、まだ分かりません。けれど、生きている証拠として、これからも大好きな写真を撮ってきたいと思います。

(表4)

#### 「命の大切さについて」

年間の自殺者が約三万三千人とも言われていますが、この数字は年間交通事故で亡くなる人が約一万人として、約三倍強にもなります。

これに関連して、ある小説家の一節を紹介します。「かつてフランスで年間一万八千人くらいの自殺者が出たことがありました。そのときに、フランスでは国内全体が大騒ぎになって、自殺に関するさまざまな討論が行われたそうです。そのなかで印象に残っているのは、一人の自殺者が出ると、その背景には十倍の自殺未遂者がいる、というデータでした。つまり、十人の人が自殺を試みて一人が成功し、九人が失敗している、と考えればいいでしょう。そうすると、日本でも年間約三十三万人が自殺を試みていて、その一割の三万三千人だけが成功している、といえるのではないかと。さらに大きな問題は、一人の自殺者が出た場合、その肉親、親戚、職場の同僚、友人たち、地域の人びとなど百五十人から二百人が、生涯ここに消えない傷を負う、という研究報告がされていたことです」（「不安の力」、五木寛之/著、集英社、2003、p56～p59）

このデータをもとに今後のことを考えてみると、ますます日本においても自殺願望者が増えていくことになるのでしょうか。

最近、「いじめ」に関する問題が取り沙汰される記事が目にとまるようになりました。いじめで悩む小、中学生を含む若者が二万人に達するというのです。実に深刻な問題です。国の教育諮問機関でもこのことを大きく取り上げ、教育現場との関連を持ちつつ、対策を講じているように見えますが、そう簡単に解決しそくにありません。

少しさかのぼりますが、質や程度の差こそあれ昔もいじめは存在していました。ただ、今の時代と違うところは、上級生と下級生のいわゆる縦の社会があって、大抵の問題は子供達同志が解決していったということです。近所の子と遊ばなくなり、縦社会が無くなった今の子供たちにとって教室という場がある意味、いじめの巣になっているのかも知れません。こんなことでは安心して学校に行けなくなるのも当然です。

何れにしても大人だけに止まらず、若年層の人たちまでもが死を選択することで楽になりたいと思う人が増えていく現状に心が痛み、小説家が出したとてつもない数字が現実にならないよう祈るばかりです。

私ごとですが、数年前、最愛の夫を亡くしました。夫は最後まで「生きたい」という気持ちを捨てませんでしたし、死にたくないという言葉を口にしていました。いわゆる生への執念です。家族の必死の願いも空しく癌という病魔に冒され、59歳という若さでこの世を去りました。私の夫のように、世の中には生きていても生きられない人がたくさんいることを私たちは忘れてはなりません。

「生命」とは命を生きると書きます。言い換えれば、与えられた命をどう生きるべきか、どのように生きていくのかということの意味にもとれます。神様から頂いたたった一つの尊い命を大切に、精一杯生きましょ。そして、今日まで慈しみ育ててくれた両親に感謝しましょうというのが私なりの解釈です。私の両親は、すでに他界しもういませんが、感謝の日々を送っています。

「人生そんなに甘くない」ということばをよく耳にしますが、人生の先輩達の素晴らしい哲学です。人生いいことばかりではないけれど、苦勞を惜しまず努力をすればその分必ずいいこともあるんだよといった意味だと思いますが、嫌なことを避けていたのでは幸福も逃げて行ってしまうということでしょう。困難に立ち向かう強い精神力と忍耐が必要です。昔のように近所同士が声を掛け合い、困ったときには助け合う社会になればきっと、死を選ばずにすむ人が出てくるに違いありません。

虐待によって幼い子どもの命が奪われ、ストーカーによる殺人事件、息子が親を、親が子を殺害するなど残虐きわまりない事件があとを経ちません。物が溢れ生活が豊かになっても、心は決して豊かとは言えないでしょう。今こそ、一人一人が命の尊厳について真剣に考える必要があります。そして、それは誰のためではなく、自分自身の命を大切にすることにつながるからです。

（2006年10月27日 受付）  
（2006年11月29日 受理）